

地域遺産の発見、
他者に伝えると
いうこと

文学部フランス文学科二年

小坂 日向子

一．はじめに

本論文では、青森県を例に地方の歴史を再解釈し、そこから「地方アイデンティティ」を発見すること、さらに、現在、地方がさまざまな問題を抱えるなかで、「地域アイデンティティ」が持つ意義を提示すること、この二つについて述べてゆきたい。なお、河西英通の著書である『東北 つくられた異境』にならって、東北・青森は広く実体としての東北・青森を、「東北」・「青森」は資料上の表記を、〈東北〉・〈青森〉は価値や評価を含んだ言説を、それぞれ意味している。

二．近代以前の青森

まず、青森県の歴史の概略を見てゆきたい。五五〇〇年前頃、現三内丸山遺跡（青森市）に大規模な集落が出現する。なお、古代の青森は、蝦夷が暮らす社会であった。一一世紀末から約十年間は、平泉に本拠地を置く奥州藤原氏に支配される。その後、安藤氏の支配のもと、日本海交易で繁栄する。十五世紀前半、青森県東部と岩手県北部を支配する南部氏が盛岡城を築き盛岡藩主となる。一方、現在の津軽地方は津軽氏が治め、津軽為信が弘前藩の初代藩主となる。一六六四年、南部藩が盛岡藩八万石と八戸藩二万石に分かれる。江戸時代にはこうして、弘前・盛岡・八戸などのいくつかの藩が置かれる。一八七一年、廃藩置県がおこなわれ、いくつかの藩に旧松前藩の館県を加えて弘前県となる。その後、県庁を青森県にうつして青森県と改称。一八七二年旧館県は開拓使に移管。一八七六年に、現在の青森県と同じ県域となる。

ここで注目すべきことは、一八七一年の廃藩置県以前、複数の藩が存在しており、それぞれ異なった文化が存在していたということである。この違いは、今なお、言葉をはじめとする様々な文化に現れている。さらに注目すべきことは、北海道の一部が青森県に属していたということである。地理的接続、風土民情の類似、ロシアへの南下政策への対抗などを背景に、旧館県との再度の合併論や、東北・北海道の総合的な開発のための函館遷都論などが唱えられたという¹⁾。また、一八八二年に描かれた下北半島の民衆像の描写には、アイヌ衣装であるアツシを身にまとう農夫が描かれており、下北の民衆にとって、アイヌの生活様式は自らの生活に即したものであったことがわかる²⁾。河西は、近代東北史とアイヌ史の相関について以下のように述べる。

近代東北史とは、あたかも3D（ステレオグラム）的世界であり、目を凝らせばマインオリテイとマジオリテイという二元的認識を乗り越える景色が見えてくる。東北は一体的な空間ではなく、少なくともその北部においてはアイヌ史が視界に入っていた。（中略）東北にとって近代とは、二重の敗北として記憶されなければならないだろう。一つは戊辰戦争における敗北として、もう一つは意識のなかにアイヌ史と

いうマイノリティの歴史を押し隠しながら、「日本」というマジョリティに逃げ込んだ敗北として」³⁾。

三、「日本」への参画、「文明」〈近代〉「文明」への劣等感

十九世紀末以降、東北は国内植民地化し、全域が後進地域と見なされるようになる。一九一三年には冷害凶作が襲い、青森県のコメ減収率は七九%にまでなった。原敬は東北の救済と振興をはかるため「東北振興会」を設立するが、岡田は、ここに「国策」的視点があり、「東北振興事業が国策として推進された真因が、東北の農漁民の救済や東北との格差是正にあったわけではなく、むしろ日中戦争が開始されるなかでの国家総動員資源政策の一環として位置づけられることにあった」⁴⁾と指摘する。「東北」は「日本」だけでなく、それを取り巻く国際社会のなかに位置付けられていた。

こうした状況のなか、東北内部ではどのような意識が生まれていたのか。河西は以下のような「文明劣等感」⁵⁾を指摘する。

青森県がより切実に直面したのは、そうした〈後進〉意識ではなく、成長度合いを質的にとらえる〈近代〉の法則であっただろう。前近代とは未開であり、不潔であり、克服されるべき段階であった。近代化とは、従来の生活様式を続ける諸条件を奪われることであり、従来の生活は続けるのに値しない生活であると認めざるをえないことであった。⁶⁾

そして、近代と文明への劣等意識は、「反中央」と〈汎郷土〉の姿勢も生み出したという。そのようななか、始まった運動が郷土芸術運動であり、芸術の土着化・地方分権運動であった。河西は、以下が郷土芸術運動の解決すべき問題であったと指摘する。

①なぜ都会と田舎の区別がこれほどまでに画然と生じ、経済的にも文化的にも田舎が都会より後れてしまったのか。

②田舎は都会を理想として「文明化」しなければならないのか。

③「すべての『青森』を『東京』とすること」が地域開発の目的なのか。⁷⁾

この言葉から、「都会―田舎」、文化の「先進地域―後進地域」という二項対立的な考えが深く根付いていたことがうかがえる。

しかし戦時中には、県民の勇武と原始産業は、近代戦勝利のために必要不可欠であると見なされるようになる。近代以降の「劣等感」に代わり、「使命感」が生み出され、それは戦争の激化とともに高まっていった。河西は「青森県意識、東北意識は〈日本〉意識と同化するに至った。戦争末期に到達した東北のアイデンティティこそが、総力戦体制を可能にした思想的基盤であった。」⁸⁾としている。

しかし、戦後、青森の認識は再び「青森県」の特性は決して誇り得る〈日本〉ではなく、中央や他地域に比べると封建的で後進的」⁹⁾なものとなり、「日本」は現前の日本へと戻っ

ていったのである。

四、あたらしい文化の発見

しかし、河西は、総力戦体制のもとで形成された東北のアイデンティティが、地域と国家の新たな関係を展望する新たな東北意識として転生したと指摘する。以下、一九四六年に太宰治が記した『十五年間』を引用する。

私はゲートルを着け、生れてはじめて津軽の国の隅々まで歩きまわってみた。(中略) 結局、私がこの旅行で見つけたのは「津軽のつたなさ」というものであった。拙劣さである。不器用さである。文化の表現方法の無い戸惑いである。私はまた、自身にもそれを感じた。けれども同時に私は、それに健康を感じた。ここから、何かしら全然あたらしい文化(私は、文化という言葉に、ぞっとする。むかしは文花と書いたようである)そんなものが、生れるのではなからうか。私は、自分の血の中の純粹の津軽気質に、自身に似たものを感じて帰京したのである。つまり私は、津軽には文化なんてものは無く、したがって、津軽人の私も少しも文化人では無かったということを見つけてせいせいしたのである¹¹⁾。

河西は「太宰の心境は敗戦による一般的な喪失感や虚無感ではない。近代東北が意識せざるをえなかった〈近代〉〈文明〉への劣等感、〈日本〉というマジョリテイへの憧憬がおよそ無意味であったことの発見なのである。」¹²⁾と考察している。ここで改めて、河西が述べる〈東北論〉の意義を引用する。

〈東北論〉の世界を通して、私たちが新しい歴史認識と自己意識を持ったとき、国民国家日本は解体されはじめ、その自明性は解体していくことでしょう。新しい世界、新しい歴史がそこから始まるような予感がします¹³⁾。

新しい〈東北〉の歴史認識によって、国民国家(日本)の幻想性が明らかとなり、太宰が見出した「全然あたらしい文化」が現れる。そのとき我々は、「なぜ都会と田舎の区別がこれほどまでに画然と生じ、経済的にも文化的にも田舎が都会より後れてしまったのか」という問いは、そもそも成り立たないことに気付く。

しかしいまなお、「都市―田舎」、「先進―後進」という考えは根強い。宮崎道生は「本州の最先端で自然的条件にめぐまれず、寒冷のため産業・文化の発達が妨げられている。端的にいえば後進県である、という印象や認識が一般的のようである」¹⁴⁾と述べている。このような認識を乗り越えるためにも、東北学を学ぶことは有用なことである。

では、新しい〈東北〉〈青森〉の像が見えたとき、我々は次に何をすべきなのか。

五. 地域アイデンティティ、自己アイデンティティの模索へ

『十五年間』にもう一度注目してみる。太宰は津軽の中に「何かしら全然あたらしい文化」を見出したとき、それを見出した自分自身が〈日本人〉ではなく、津軽人であるということを自覚した。ここに、「地域アイデンティティ」と「自己アイデンティティ」とのつながりが見えてくる。

阿部四郎は「地域アイデンティティ」の探求を、「実体的な環境条件と社会的実践の歴史に刻まれた特定の場の上に、そこに生きる人々が自己理解や自己表現の場に必須の関係性を共有できる社会空間を発見し確認しようとする主体的取り組み¹⁵⁾」としている。太宰は「自己理解や自己表現の場に必須の関係性を共有できる社会空間」を津軽に見出したのだともいえる。「地域アイデンティティ」の探求は、「自己アイデンティティ」を確立する一つの手段となるのである。

さらに阿部は、「地域の独自性について、所与の内向き志向では、その生存と再生が他との可動的相互関係における自己更新に大きくかかっている¹⁶⁾」としている。これは、現在、地方が抱えている問題と大きく関わっている。民間の有識者で構成される『日本創生会議』によると、二〇四〇年までに、五二三の市町村では人口が一人未滿となり、消滅する恐れがあるという。消滅可能性は、秋田県が第一位で九六%となっており、青森県がそれについて八七%となっている。つまり「自己更新」のためには他者の受け入れが必要不可欠となっている。阿部はこのとき、「内向きメッセージのなかに他の共感の響きを獲得しよう、つまり独自性を普遍性に連ねる回路の模索¹⁷⁾」が求められると述べる。具体的に、どのような取り組みが可能だろうか。例えば、青森県立美術館のコンセプトブックには、以下の言葉が記されている。

ある特定の部分を抽出、操作してステロタイプ化した青森のイメージを強化するのではなく、その解釈の可能性を広げたり、同世代の他地域との共通性を探ることもまた、「青森」を考えることになるはずです。実際に、展覧会や美術館の各種活動はそうした観点も踏まえています。むしろ「青森」をとおして、「世界」や「現代」はどう見えてくるのか。青森県立美術館が目指す活動の本質はむしろそこにあると言えるでしょう¹⁸⁾。

現在、このように、文学、美術、ほかにも様々な分野において、地域アイデンティティを他者に伝えるための回路が模索されている。そのような回路を模索し続け、形にしていることが、地方が抱えるさまざまな問題を解決するための手がかりになるかもしれない。

六. 最後に

本論文では、青森の歴史と文化の再解釈と、そこから生まれる地域アイデンティティ、さらに、地域に生きる人々の自己アイデンティティについて考察してきた。最後に、赤坂

憲雄の言葉を引用する。

それぞれの地域の歴史、文化、風土の読み直しから地域のアイデンティティの模索へと深まりゆくなかに、しだいに地域遺産がくつきりと姿を現してくる。神のごどき絶対の他者が、外から認定するのではない。地域に生きる人々がみずからの幸福のためにもとめ、みずからの意志選び取る。みずからの暮らす地域をたいせつにおもう心こそが、やがては異質な他者、異質な文化や民族や宗教をあるがままに認め、ともに生きる寛容の精神をつくるのではないか¹⁹⁾。

新しい東北像があるように、ほかの地域にも新しい歴史や文化などの「地域遺産」が存在する。それぞれの、〈日本〉という枠組みには収まらない地域遺産を発信しあい、受け入れるとき、そこに新しい列島文化がみえてくるはずだ。

- 1 河西英通「近代東北の意識 青森県を例として」、渡辺信夫編『東北の歴史再発見 国際化の時代を見つめて』、河合書房新社、1997年、187―189頁。
- 2 河西英通、同上、190頁。
- 3 河西英通「近代日本と東北・東北人論」、大門正克編『生存』の東北史：歴史から問う 3・11』、大月書店、2013年、60頁。
- 4 岡田知広「災害と開発から見た東北史」、大門正克編、前掲書、18頁。
- 5 河西英通「近代東北の意識 青森県を例として」、198頁。
- 6 河西英通、同上、197頁。
- 7 河西英通、同上、200頁。
- 8 河西英通、同上、201頁。
- 9 河西英通、同上、209頁。
- 10 河西英通、同上、210頁。
- 11 太宰治「十五年間」、『太宰治全集8』、ちくま文庫、1989年、238頁。
- 12 河西英通、「近代東北の意識 青森県を例として」、211頁。
- 13 河西英通、『東北 つくられた異境』、中公新書2001年、199頁。
- 14 宮崎道生、『青森県の歴史と文化』、津軽書房、1976年、39項。
- 15 阿部四郎、「地域政策と文化・歴史の再解釈」、渡辺信夫編『東北の歴史再発見 国際化の時代を見つめて』296頁。
- 16 阿部四郎、同上、297頁。
- 17 阿部四郎、同上、297頁。
- 18 工藤健志編『青森県立美術館コンセプトブック』、スペースシャワーネットワーク、2014年、10頁。
- 19 赤坂憲雄。『方法としての東北』、柏書房、2007年、207頁。